は決して唯一度限りの過去の事件を記念しようとするものでなくして寧ろ年々繰返へして行はるゝ祭儀の理由を説明し眼前の事實として存在する民族的國家の起源を説かうとするものであるとする一般的解釋が一應正しいとしても、古代の神話を理解するに現在の民俗を以てすることは時代の倒錯であり、若し現在の民俗が類型的にせよ古代のそれと同一であることを假定するならば、それは神話が時代によつてその意味を改めて行くとする歴史的立場と自ら矛盾する如くも考へられるからである。たゞ併しながら古代神話の基礎にあるとされる古代の民族生活なるものは所謂歴史的、文獻的方法のみを以てしては容易にその全體の把へ難いに對し、現在の民俗の考察に於ては、全體の理解がまづ我々に直接なるものとして與へられて居り、それによつて個々の行事や説話の意味を正しく判斷しうるところに、それを基礎に古代神話の意味をも類推しうべき可能性が存するのである。

氏が果して如何なる程度までこの可能性をよく現實になしえたかは、各編個々に就て一々檢討してみるの外はないが、今全體としてこの書に看取せられるものは氏の神話解釋に於ける強き合理主義であると思ふ。それは勿論かの古き Euhemerismus のそれではないが、少くともあらゆる神話に於てその意味は我々の論理によつて殘るところなく把握しうべきものであることを豫想する。例へば一つの神話を定立するものはその社會であるとする氏の基本的假説は畢竟神は人なりといふに代へて神は社會なりといふと一つであるともいへよう。あらゆる意識が遂に存在に還元しえらるべきものか否かの論議は姑く措き少くとも神話にあつては其非合理的なる要素こそ寧ろ一層重要なる意味を有つものと考へられるならばこの新しき合理主義の限界も自ら知られるであらう。(その點かの所謂比較神話學が意識を意識として唯その間に發展關係を考へようとするところ已が分野を守るものといひうる。)

紙幅の關係上論旨の内容に就いて今一々紹介することの許されないのは是非なきところであるが、本書中最も長く且最も力作とも考へられる賀茂傳説考に就ては嘗てそれが東京文理科大學紀要として始めて世に出たとき(昭和八年)、本誌に於てもその内容を紹介したことがあり、その他の諸篇また同じく氏獨自の意見に富み極めて示唆深きことを述べてこの文を畢る。(菊判四五二頁、東京河出書房發行、定價三・五〇)(柴田)

寧樂佛教史論

大屋德城著

大屋氏は既に佛教史學に關する多くの著述によつて知られてゐる人であるが、本書はそれらの過古に於ける業績を地盤として新たに寧樂佛教の本質を究明されたものである。けれ共我々は寧樂佛教史論を通讀してその組織や論述の意圖に觸れる時、氏の前著日本佛教史の研究とは又異つた意味に於て優れた價値を見出す事が出來る。第一に本書は其の題名から直ちに想像される樣な單なる寧樂佛教に關する概説書ではなく、日本佛教の展開過程に於て寧樂の佛教がどの樣にして形成され又一轉しては其れが平安朝以

後の佛教の主流と如何なる聯關に於て發展して行つたかが述べられてゐる。從つて本書の說く所は、筆を古く佛教傳來の問題に起して室町期に於ける寧樂佛教の衰頽に及び、日本佛教のあらゆる問題を南部六宗を中心として提出し、問題史的な形に於て論理を展開せしめてゐる。

先づ第二章に於ては寧樂佛教の形成過程を論じ、六朝佛教の受容に依つて成立した我が飛鳥時代の佛教は古代日本の文化に黎明の曙光を與へたものであり（第二節飛鳥朝の佛教と其文化的意義）それの發展としての白鳳時代は又絢爛たる寧樂佛教完成への過度期として初唐佛教の影響を受けた時代であつた（第四節白鳳時代の佛教）。併し特に聖德太子の憲法や義疏の撰述は或る意味に於て日本文化の獨立を意圖した聖業であり、やがて其れは大化改新の指導理論として取り入れられる事となつたとする。白鳳期が初唐の佛教を急速に受容した事は、現存の多くの經卷や藥師寺三重塔銘、又長谷寺千佛多寶塔銘の證する所であるが、併し此の時代が眞に寧樂佛教への過度期と考へられる所以は、彼の藥師寺や長谷寺によつて代表せられる飛鳥以來の傳統に對して、やがて奈良朝に興隆する金光明經や仁王經の信仰が既に現れ初めてゐる點にある。卽古代日本の平穩な風土に育まれた素朴な精神の中に新しく移入された佛教は先づ除病延壽の菩神として藥師や釋迦・彌勒の信仰を生み、それがやがて奈良朝に近付くと共に正法を宣布して國家の安寧を圖る護國思想へと發展して行く。つまり個人の幸福と國家の平安を求める精神は上代佛教の二大系統であつた。仁王經・金光明經・又最勝王經には國家の平安と同時に個人への福音が說かれてゐる。此の古い二つの系統が投影されたものこそ天平の佛教であり、其れが政治の世界に迄喰入つた時彼の國分寺の建設となつて現れたとするのである。

此の樣に寧樂佛教の成立過程を論じた著者は第三章に於て多角的な當代佛教の樣相を分析し、其處に種々の特色を見出してゐる。寧樂佛教の最も基本的な性格は、一は飛鳥時代以來佛教一般の底流として受け繼がれた所謂「ほがらか」な現實性の擴大であり、二は寧樂諸大寺に於ける無宗派性であつた。天平文化を代表する大盧舍那佛はその淨土蓮華藏世界を現實に示した所の非彼岸的表現であり、又寧樂佛教に六宗の名稱はあつても其れは單に所謂德業としての分派を示してゐるに過ぎない（第五章寧樂朝佛教の特色）。けれ共全奈良朝を通じて政治社會の推進力とさへなつた當代佛教の特色は、單に現實的といふ面のみによつて說明される事は出來ない。天平の文化が日本の歷史の中に永遠なる意味を持つ所以は此の樣な佛教の現實性にあるのではなく、寧ろ聖武天皇光明皇后を初めとして當時の有力な知識人達が佛教に對して示した深遠な理解になければならない（第六章知識階級の思想）。併しそれにも關らず寧樂佛教の現實的傾向は時代が平安朝へ進むと共にまた新たな形に於て展開する運命を持つてゐた。平安朝に於ける日本佛教の特色は、要するに貴族社會の感覺的趣味に支持された密教的者の展開にあると言へるであらう。顯密一致を唱へた最澄の教學すらやがて圓仁圓珍安然等の遮那業擴大

の叫びとなり、遂には理同事勝の結論に達して所謂台密十三流を生む事となつた。此の様な新佛教の大勢の中に在つて寧樂の佛教は常に順應と反撥の二面を展開させてゐる、（第四章平安朝以後の寧樂佛教、第九節平安朝以後の二大傾向）。寧樂佛教の現實的な面は既に早く奈良朝に於て辨才天・吉祥天の卑俗な信仰を生み、又悔過の佛事や百萬小塔の造立に見られる様な攘災招福の密教的主張ともなつたが（第節無垢淨光七經の信仰）、此の傾向は圖らずも平安朝に於ける密教流行の流に乘り、寧樂六宗は滔々として密教化の過程を辿つて行つた。勿論傳教德一の間に行はれた一乘三乘の論爭や天台大乘菩薩戒壇の設立に關する鬪爭の如き叡山に對する反撥の一面はあつた（第十節叡山佛教との衝突）。併し大勢は密教に對する順應によつて支配され或は南都諸宗の眞言兼學となり又興福寺眞興の子島流獨立となつた（第十一節東密の侵潤）。此の様な順應の一面としては尙神祇への習合が行はれ、東大寺に勅請された宇佐八幡は阿彌陀を本地とする僧形八幡となり、又藤原氏の祖神天兒屋根命は容易に氏寺興福寺と結合して法相擁護の神となつた（第十二節本地垂迹と神祇第十五節造像の新様式と新信仰）。此處にも亦密教的傾向の侵潤が考へられる。實に順應と反撥は寧樂佛教が新しき世代に生きんが爲の努力であつた。此の二ツの傾向は更に鎌倉時代にも引繼がれ法然に對する興福寺や栂尾派の反對・片岡の達磨寺に對する興福寺の彈壓等新興佛教への反撥があると共に又一方に於ては三論法相華嚴等の諸宗は多く諸行往生を唱へて西方に歸し或は榮西・辨圓等の禪學に接近して教禪兼修の風を生んだ（第十六節鎌倉佛教との交渉）。特に後者に就いては當時新しく移入された宋代佛教に於ける諸宗相融的傾向の影響はあつたにしても其處には明かに新しき者に對する順應の態度が考へられる（第十四節宋朝の文化と傳統の文化）。

此の間平安朝末期に於ける寧樂の佛教は、一般佛教々團の頽勢と等しく僅かに東大興福兩寺によつて命脈を保つ狀態であつた。併し此の時突如として下された平重衡の大鐵槌は圖らずも彼等に方向轉換の機會を與へる事となつた。彼等の復興運動の根本精神は先づ何よりも釋尊へ還へる事であつたが、併し具體的な眼目としては彌勒信仰と戒律復興が揭げられ、前者に就いては貞慶を先達とする宗性・實弘があり後者に關しては實範・貞慶・高辨・興盛・叡尊等の運動が轉開された。日本佛教の大聖聖德太子に對する信仰が勃興したのも復古運動の一現象であり（第五章寧樂佛教の復興と衰運第十三節復古思想と其顯現）、又寫實的な手法によつて剛健な風を表現した佛教藝術の「心は天平に憧れ」てゐたのである（第十五節造像の新様式と新信仰）。かくて天平を心として復活した寧樂佛教は一方に於て興福寺を中心とする舊藤原の傳統的文化を發展せしめ、又他方に於ては東大寺を中心として新しく移植された宋代文化を興隆せしめたのである。

けれ共此の様にして一度び復活した寧樂佛教も、時代が鎌倉より室町の動亂期へと進むに從ひ歷史の流れに押し流されて一路衰頽の途を辿る事となつた。此の時期には西大寺叡尊の門流や戒壇院湛叡一派の鎌倉進出があつたが（第十七節寧樂佛教の關東進出）、併し教團の經濟的困窮も原因して再び淸新の氣を失ひ遂に復興の

機に惠れる事がなかつた、とするのである。

以上は菊版七百頁に亙る大著、寧樂佛教史論の中に展開されてゐる論理の簡單な紹介に過ぎない。著者は上述の樣な寧樂佛教の發展過程の中に特に推古と天平と鎌倉の三大精華を見出し、これこそ絶えず大陸文化と密接な關係を保ちつゝも尙それ等を日本的形態に於て發展せしめた所の所謂寧樂佛教の本質である事を言つて居る（第六章結論）。併し著者の到達した此の樣な結論は決して單に抽象された簡單な論理の歸結ではなく、其處には著者が永年此の領域の開拓に傾注した深い體驗が偲ばれるのである。事實本書に於ては尨大な和漢の文獻が引用され、あく迄嚴密な實證が論理の構造を支へてゐる。我々は此の點に、寧樂佛教史論に於ける第二の價値を見出す事が出來るであらう。實證と文化史的理解の綜合は著者が研究の方法に就いて省た態度であるが（序文）かゝる著者の意圖は本書に於てその大半を果し得たと言ひ得るであらう。勿論多少の難點に就いて、例へば天平に於ける佛教文化の成立がどの樣な歴史的必然に於て行はれたか、或は又鎌倉初期に復活した寧樂佛教の衰亡に就いて「論議の弊」「密教化」「大陸に於ける佛教の衰退」の如き佛教自體に關する精神的なる者を强調し過ぎた感のある點等一二の不滿を數へ得るであらうが、併し本書の如く寧樂の教團と教學の發展を一般歴史の經過の中に綜合し得た高き境地は、著者にして初めて爲し得る所であると言ふ事が出來る。

尙本書は文獻の博引と問題の複雜性に於て多少難解の感はあるが、反覆熟讀する事によつて自ら著者の意圖が感得されるであらうと思ふ。（東方文獻刊行會發行、定價七〇〇）（內藤晃）

豐大閤眞蹟集　解說共　二冊帙入

東京帝國大學史料編纂所編

豐公が卑賤より身を起して終生無學であつたことは、醍醐の醍の字を失念せる右筆に對し、かくの如く書くべしとて大の字を書示したといふ老人雜話に見ゆる有名なる話柄によつて廣く喧傳せられてゐるが、その眞蹟の今日に遺るものは意外に多く、近年大阪城天主閣に於ける數次の特別展觀に際しては殆ど每回從來學界に多く知られなかつた新しい眞蹟の出陳せらるゝものがあつて人々を驚かせたことであつた。我々はそれらのものに接する每にその眞情流露、磊落にして然もよく念のとゞきたるところ、眞に豐公その人に面接する思ひあるを見、それらが恐らく公の在世の當時より特に愛惜珍重せられて永く今日に傳はるに至つたことの眞にむべなるを知ると共に、我々も亦之を單に一回の展觀に終らしめず、出來ればそのすべてを影印にとゞめて之を座右におきたいと思ふ慾望の切なるものがあつた。當時展觀當事者にあつても亦その意圖あつた由であるが、早く史料編纂所に於て同種の企あるを知つて之を中止せられたかにも聞いてゐる。爾來我々は多年この書の出現を偏に期待してゐたのであるが、同編纂所にあつてはこれが編輯に特に愼重なる態度を以てし、眞僞の判定に過誤なきことゝ傳存のものを網羅して遺漏なからんことを期せられ漸く今日に至つてその大成を見たのである。